



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

四旬節第1主日 A年(2026年2月22日)

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 2章7—9節、3章1—7節

第二朗読：ローマの信徒への手紙一 5章12—19節

福音朗読：マタイによる福音書 4章1—11節

四旬節

四旬節とは主の過越^{すぎこし}(主の復活)前の六週間^さを指します。具体的には灰の水曜日から始まり、復活祭の前日(聖土曜日)まで続きます。四旬節には、主の過越^{むか}しを迎える準備^{じゅんび}を行う典礼の季節と、主の過越^{ひぎ}の秘義^{あずか}に与る入信^{にゆうしん}の秘跡の準備を行う典礼の季節という二重の意味合いがあります。特にA年は洗礼準備のための朗読箇所が準備されています。

第一主日：誘惑^{ゆうわく}、第二主日：主の変容^{へんよう}、第三、四、五主日：洗礼の準備^{かいしん}と回心、第六主日：受難^{じゆなん}がテーマとなります。

福音朗読に注目してください。

「わたしの愛する子、わたしの心に適^{かな}う者」(3章17節)と証言した神の霊^{れい}は、今度はイエスを荒れ野へと導きます。イエスさまは三回にわたって「試み^{こころ}」(4章1節 フランシスコ会訳)を受けます。

2節の「四十日間、昼も夜も」ですが、フランシスコ会訳では「四十日四十夜」となっています。三つの試練^{しれん}を受けたことは、イスラエルの民^{たみ}が荒れ野において四十年間(申8章2、4節)にわたって三つの試練^{いっち}を受けたことと一致します。

4節にあるイエスさまの答え、「人はパンだけで……」ですが、三つの誘惑^{いんよう}に対して、イエスさまが神の言葉、すなわち聖書からの引用^{しんめいき}で答えた点をここに留^とめましょう。一つ目の誘惑は『申命記』8章3節から、二つ目の誘惑については『申命記』6章16節から、そして三つ目の誘惑については『申命記』6章13節から取って答えます。

「高い山」(8節)。『マタイによる福音書』では、山は特別な意味を持っています。旧約の律法の完成を告げるイエスさまの教えの場は「山」でした(5章1節)。イエスさまの究極的な勝利の場所も「山」でした。「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておられた山に登った」(28章16節)。そこで復活したイエスさまは「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と言われます(28章18-20節)。

「一切」、「すべて」が繰り返し使われていることに注目してください。4章8-9節でも「すべて」、「みんな」が繰り返し使われています。

シナイ山で神さまがモーセにご自分を現したのと同じように、イエスさまは「高い山」でご自分が誰であるかを示すのです。そして、真の礼拝の対象は「悪魔」ではなく、復活したイエスさまとなります。「そして、イエスに会い、ひれ伏した」(28章17節)。

10節にある「退け、サタン」と同じ表現は、フィリポ・カイザリア地方で受難を予告したイエスさまを非難したペトロへ向けられた言葉に似ています(16章23節参照)。「サタン」はヘブライ語から借用したことばだそうです。元々は「訴える者、誹謗する者」の意味だそうです。『ヨブ記』の1-2章にあるサタンは、人の悪や不正を探り出して神に告発する検察官として登場します。「人を悪へと誘う誘惑者、悪魔」としてこの言葉が使われるようになったのは比較的新しい時代になってからだそうです(雨宮師参照)。

【あじわいのポイント】

三つの誘惑を整理してみましょう。

第一の誘惑は、石をパンに変えるというのですが、生きていくためには神との関わりを捨てて、パン、つまり物質や人に依り頼もうとする生き方を暗示します。イエスさまは神の力を自分のために利用せず、「神の口からでる一つ一つの言葉」に頼ります。

第二の誘惑は、神殿から飛びおりろというのですが、イエスさまは神さまを試すことなく、神さまが示した道を歩むことを選びます。ここには、「今すぐ十字架から降りてみるがいい」(27章39-44節参照)が響いています。

第三の誘惑は礼拝に関するものです。悪魔は神の栄光ではなく、世の栄光を選ぶようにと誘惑し、自分を拝めと求めます。しかし、神を拝むこと(10節参照)こそがイエスの使命だったのです。